

■特集：シンポジウム「世界自然遺産と持続可能な発展」

ゲスト対談：世界自然遺産と環境政策

特別ゲスト：小野寺 浩（鹿児島大学特任教授・前環境省自然保護局長）

養老 孟司（東京大学名誉教授）

司 会：山田 誠（鹿児島大学教授・「奄美の『島』コスモス創出事業」代表）

日時：平成 18 年 11 月 20 日(月) 場所：奄美観光ホテル

「(屋久島が遺産登録された際に何が起きたかというと、) 富士山にものすごく怒られまして (笑い)」



「(石油が切れて) エネルギーのレベルを下げたとき、東京は……もちません。(逆に) 地方の方が未来は明るいんですもん。」



奄美の世界自然遺産登録の申請準備が本格的に始まった。この時期に、鹿児島大学も奄美における地域貢献をもっと充実していく構想を練っている。その構想を具体化するに当たり、私たちと別な視点を持つであろう専門家の小野寺浩氏と養老孟司氏の奄美論を拝聴することにした。環境政策の第一人者と基礎医学の研究者という組み合わせの対談は、何度も笑いの渦を巻き起こしながら、予想外に自然の保全策よりも地域の暮らしのあり方について論議が中心の展開になった。

200人ほどの参加者は、専門的な政策論、哲学的な問題提起をどう受けとめたのであろうか。会場は年配者が多く、対談が求めたフロアからの発言者も島外の方やUターンの方が多かった。これは何を意味しているのであろうか。そして、最後に、一人の高校生が会場に向かって語りかけた……

(山田) 皆さん、今日は。養老先生、小野寺先生をお迎えして、特別対談をやらせていただきます。両先生は、早朝起床のうえ長旅をされて、かなりお疲れです。少しお休みくださいと何度か申し上げました。ですが、第一部での熱心な討議に目を離せないと、最後まで会場でお聞きになっておられました。特別対談の方は、持続的発展の問題と世界遺産を結びつけるという難しいお題を頂いております。いくらかでも座布団がもらえるような展開になればいいなあ、と思っております。

あらかじめお断りしておきますが、壇上では敬称を省略させていただき、ずうずうしく小野寺さん、養老先生と呼ばせていただきます。両先生は奄美においていろいろご講演などをしていただいている関係で、もう奄美の方々にはおなじみだそうですね。しかしながら、本日は、初心に戻って入り口のところからお話をいただこうと思っております。

最初に、小野寺さんから話してもらいたいと思います。小野寺さんは、世界遺産条約に未加盟であった日本を加盟させる仕事をやり遂げられた方です。したがって、条約加盟の意味を少し語っていただいて、さらにもう1つ。条約への加盟と、日本の中のある特定の地域が遺産として登録されることの意義についてお話を頂きたい。その一般論を受けて、少しずつ奄美の問題につなげていくという進め方をさせていただく方針です。小野寺さん、この展開を想定してもらったうえで、お話しただけいたらありがたいです。

【世界遺産条約の原点と屋久島登録】

(小野寺) 小野寺です。よろしく申し上げます。世界遺産条約はそんなに古い条約ではありません。条約ができたのは、エジプトで大きなダム計画があって立派な宮殿が水没することから出発しました。したがって、開発途上国で開発をして自然なり文化財なりが物理

的になくなってしまうのを、残すか、残せないならば少なくともしっかりした記録を作るということを、先進国がお金を集めて応援しようじゃないかということが遺産条約の出発です。

日本は、非常に遅れてこの遺産条約に参加しました。遅れた理由は、どうしてかというのはよく分からないんですけど、あんまり大した条約だと思っていなかったのかもしれない。あるいは、環境庁がさぼっていたということもあるかもしれません。国際条約の締結にはなかなか複雑な手順が必要ですので、そんなに積極的な反対があったわけじゃないんだけど何となく遅れて、先進国の中で一番遅い参加だったように思います。

【条約批准より前に屋久島登録の機運】

それで、私が平成2年に鹿児島県庁に来て、屋久島の仕事を始めたときに、屋久島を世界遺産にという話が出ました。しかし世界遺産に屋久島を登録する以前に日本が遺産条約に参加していないということがありました。まず遺産条約を日本政府に締結してもらって、その後で屋久島にしるどこにしるという手順が必要でした。非常に幸運に恵まれて、平成3年にその話が起きて3年後の平成5年12月にうまく屋久島が登録できました。そのことには、いろいろな人が協力したんだと思います。

【遺産登録の予想を超える影響】

新しい条約の中で登録されたのは、文化遺産で法隆寺と姫路城、自然で屋久島と東北のブナ林の白神山地でした。それからもう13年たちました。13年たってみると、だいたい考えていた通りということと、考えていることと違うことがだんだんはっきりしてきました。一番意外だったのは、遺産条約に登録されることである程度は世間の注目を集めるだろうけれども、この手の条約登録は



そんなにもものすごい動きにならないんじゃないかというのが、平成3年から4年ぐらいに係わっていた人間のだいたいの想定だったんです。

ところが、この手の条約の中で異例だと思いますけど、おそらくちょっとこれほど反響が大きいものはないと言ってもいいぐらいでした。テレビや写真集や活字媒体が、遺産条約をめぐるいろいろな形で伝える。最近では、旅行会社が旅行のツアーを組んで世界遺産めぐりをするという展開になっています。

〔世界遺産条約の特徴——人類が引き継ぐという発想〕

そういう動きがこの十何年の中で起きた理由は、遺産条約そのものの性格です。世界遺産条約の一番の特徴は、これは誰の知恵かわかりませんが、なかなかいい知恵だなと思うのは、人間が作ったわけでもない優れた自然と、人間が作ってきた文化的遺産、文化財、歴史的な遺産というものをまったく1つの概念で扱うんです。それを一くりにして後世に人類が引き継ぐべき財産だと定義した。ある種コロンブスの卵みたいなものですけど、

それが何かやはり人の心をつかんだんだろうと思います。そういうくくり方が世界遺産条約の最も斬新なところで、そこが世間に受けて、大きな流れが1つできているということでしょう。

〔地域にとってのプラスとマイナス〕

2番目の地域との関係でいうといい面と悪い面と両方あると思います。遺産条約に登録されることで注目を浴びて、観光地だと人がいっぱい来る。その来方がやはりかなり激しい。観光客がいっぱい来るということは、いろいろな資本も来ることを意味します。ある種の利にさとい人たちがビジネスチャンスだという形で入ってくるということ、また物理的に50万人や100万人オーダーの人が押し寄せるという現象が起きる。そういうことの中で、地域が経済的に潤う部分と、自然環境がそのことによってインパクトを受けること、さらに言う地域社会が今までのわりと落ち着いた感じからそうではない形に変質していくというのが、どうも現実の中で起きていることですね。

【奄美のおもしろさ】

(山田) 第1ラウンドということで、少しコンパクトに、まとめていただきました。

養老さんは、永田学長が紹介されたように、若いころから奄美に縁があって、奄美ファンだと聞いております。この前はいつだったでしょう。確か3月のことだったとお聞きしていますが、講演であるいは講演と関係なしに昆虫採集の網を持ってうろうろされたんでしょうか。たいへんな奄美ファンの養老さんからご覧になって、来てみたい奄美の魅力は、どこにあるんでしょうか。養老さんは日本中あちこちに行かれております。先ほどありました白神山地にしろ知床にしろ、素晴らしいところをたくさんご存じだと思うんです。そうした中であって、奄美は面白いよと

言って昆虫採集の網を振り回しに来られるポイントをお話しただけでうれしいのですが……。

【奄美の魅力と遺産登録の影響】

(養老) もちろん奄美の魅力は、奄美が外の土地とはずいぶん変わっていることです。動物、虫が変わっている点は一番大きい。沖縄も違うのですが、奄美の方が変わり方は強いんです。それは、おそらく虫を採る人はみんな感じている。実際に来ると分かるんですが、やはり沖縄の方が観光地化してしまっていて、奄美には素朴といえば素朴な状態がよく残っております。歩いてみて分かるように、奄美は非常に山の多いところで、北の一部を除けばほとんど全部山です。そういう意味でも、我々には感じがいい、来やすいところですね。

【鎌倉の文化遺産登録運動】

ところで、奄美とは全然関係ない話をここで持ちださせて下さい。小野寺さんが世界遺産登録というとんでもない事業を国内に持ち込んだために、私は、今、鎌倉の世界遺産登録を推進する会の会長をやらされています。鎌倉の場合は、奄美と違って文化遺産なんです。推進する会で何か言えというから、あんな汚い町、何で世界遺産にするんだとまず言ったんです(笑)。実は、以前に日本の中で遺産登録の候補を挙げたときに、鎌倉は入っていたんだそうです。今では、奈良、京都が済んじゃって、鎌倉は残っちゃっている。市長が何か慌てて、自分がいる間にどうしてもと言って頑張るものですから、今、推進する会と付き合っています。私個人は遺産登録されようが登録されまいが、どっちでもいい。

遺産登録の影響を考えると、小野寺さんの指摘、状況が変わってくるというのは、とても重要だと思いますね。鎌倉の場合には初め

から観光地ですから、おそらく変わりようがない。すでに、これ以上悪くなりようがないというレベルになっていますから。ただ、奄美はやはり相当影響あるかなと、考えております。それが、いいか悪いかは分かりません。

ただ、今申し上げた奄美のよさ、自然のよさという面から見ると、必ずしも歓迎すべき事態とは言えないですね。でも、逆に遺産登録が大事なことでもあるのです。鎌倉の場合なんですけども、あそこは東京のベッドタウンで、住んでいる人が地元へ愛着を持っていない。

もう1つ付け加えると、小野寺さんクラスの偉い人が引退して住むところなんです。そのため市民の高齢化率が非常に高くて、しかも、元偉い人が非常に多いものですから、何かというと自治体に文句を言うてくるという町です。そんなところで世界遺産の登録なんて持ちだすと、たちまちカンカンガクガク、もううるさくてしょうがない。今月も鎌倉で推進する会がある。本当は出たくない。出ると、血圧の上がるのが心配で心配でしょうがない(笑)。



【住民がまとまるきっかけ】

でも見方を変えれば、遺産登録でもないと、大きな目できちんと地元のことを考え、皆さんが何かするチャンスがとても少ない。ですから、この登録問題は上手に利用すべきではなかろうかと思っています。というの

は、気持ちをそろえて地元のために何かする機会に利用したらいいんじゃないかと。私が会長を引き受けたのは、あれだけ住民がばらばらになっている町を、何かの形でまとめることができるといういいなあ思ったからです。実現できなきゃできないでいいやと、初めから割り切っているものですから、引き受けたんです。

司会者の方から出された問いかけに引きつけて言えば、僕が奄美に最初に来たのは昭和38年なんです。その奄美も、素朴とはいっても、あの当時と較べれば、今はばらばらになっています。あの頃、古仁屋から各部落に行くには、午後2時のポンポンという船、それしか交通手段がなかったです。それからずいぶん経って、かなり最近になり再びやって来て、これだけあちこちに道路ができてののに仰天しました。そこまで変わってきていますから、やはり奄美の人たち共通の郷土といえますか、この土地全体の課題について関心を持ち、一緒に何かするという機会になれば、遺産登録は、非常にいいんじゃないかなと思っています。

【奄美の『島』コスモス創出事業——世界自然遺産登録運動】

(山田) ありがとうございます。今、養老さんから、地元の方々が1つのテーマを核にしていろいろな観点から考えるチャンスとして遺産登録をとらえればいいのではないかとの指摘がありました。実は、私は鹿児島大学の中で、この数年間、奄美と深くかかわってきた一人ですが、まったく同感です。ここで、自己紹介をかねて、今回の企画の主旨を簡単に説明したいと思います。

私どもはこの3年間、島嶼圏開発のグランドデザインというテーマでもって奄美と取り組んでまいりました。奄美が多島構成であることから、シンポジウムも奄美大島だけではなくて、沖永良部でも開かせていただきました。

また、私どもの機関紙、『奄美ニューズレター』も地元で2百部ほど配布させていただいております。しかしながら、3年間たって振り返ってみた時、一生懸命もがいてやってきたわけですが、どれほど地元の方々に考えていただく契機を与えただろうか。やはり独り相撲が大半ではなかったかという結論に至りました。そこで、私たちは少し発想を変えてみました。一番に新しさを強調して世界自然遺産登録というものをメインに据えてみたわけです。先ほどの養老さんの意見と同じ思いから、遺産登録を真正面から出すことにしました。それが奄美の『島』コスモス創出事業というプロジェクトです。



〔環境維持と利便性の追求〕

本プロジェクトではもう1つ、新しい試みを打ち出しています。それは、自然保護とか保全というものをあまり狭く考えないことです。少しだけ説明を加えます。奄美の自然は、他のところと比べれば豊かで、あまり破壊されていない。だからこそ世界自然遺産登録の候補地になるんだと思いますが、それがもう一方の違う価値観の方々からすれば、経済活動の面でどうも開発がうまく進んでいない。ある種の引け目のようなものが感じられる。これらを踏まえて、私どもがプロジェクトで目指そうとしていることを一言で申し上げます。

この豊かな自然を持っている奄美、それと

仲良く付き合っていく。その事業を進めていくことと先進的な開発の実施が結び付くのであれば、どちらの側に立つ方々であれ、私たちと一緒にやってくれるのではないか。だいたい学者や研究者は非現実的な絵空事しか考えない。したがって、私たちの構想するプロジェクトも、あるいは失敗するかも知れない。その時は、失敗してもいいんじゃないかと思っているわけです。つまり、一方の側がマイナスと見ていることを、他方の側はプラスと見ている。そこにまったく新しい事態を生み出すことで、どちらの側の方々も、まあ一緒に頑張ってみるか、と言ってくれる。そういう1つのきっかけづくりになるようなプロジェクトにしたいわけです。

〔理系を軸に新プロジェクト——目に見える成果〕

今回のプロジェクトが前回と違っているのは、まず、参加メンバーの3分の2から4分の3ぐらいを理系の研究者にしている点です。といたしますのも、文科系の人間のやる研究は傾向としてどうも根暗になりがちです。ですから、皆さん方に、いいぞ、頑張っているな、なんて肩をたたいてもらえるシーンは起こり難い。理系の方々、とりわけ工学系や農学系の研究者が少し大がかりな取り組みをしますと、立派なインフラストラクチャーといたしますか、施設や生産物といった目に見えるものが現れます。そうすると、よう頑張ったとか言って、仕事の中身を理解しようとしてくれるのではないか。つまり、私たちの主張を形にして見せることが大切ではないか。

例えばバイオマスを利用してガスを採取する。あるいは、廃棄物。それを単に燃やしてしまうだけではなくて、燃やすことで生じる熱エネルギーを有効に使う施設に代えてみるというプロジェクトだと、環境をあまり傷付けないで、便利な生活も実現できる。その時

には、お前たち大学の連中もちっとは頑張れるんやねと、見直してもらえるかも。こんなことを、私どもは考えているわけです。

これに4~5年かけて挑戦する。奄美の群島の中で1つでも2つでも実施する。うまくいけば3つ、4つ実現できないだろうか。この間の経験をバネにして、私どもがスタンスを変えたことを宣伝しても、皆さん方にはなかなか聞いてもらえない。そこで、本日のゲストとして偉いお2人を迎え、その力を借りて、私たちが新しいスタイルでやり始めたということを紹介する機会を作った次第です。以上で、第2部に登場している3人の自己紹介を終わらせていただきます。

〔県に2つの自然遺産、屋久島特徴はどこか〕

では、小野寺さんの第2ラウンドに移りたいと思います。小野寺さんは鹿児島県で自然保護課長をしておられました。私どもは、柳の下のドジョウを狙って、屋久島に続いて奄美でも、小野寺さんのお力を借りたい。奄美でこれまでになかった仕事をやり遂げる仲間になっていただきたいと、熱烈に呼びかけています。

ところで、以前の鹿児島県庁での仕事に引きつけていけば、鹿児島県は、奄美の遺産登録に成功すると2つの自然遺産を持つ県になります。日本にそんな県はありません。これは外に対して鹿児島県が非常に面白い地域だということを端的にアピールする例ではないでしょうか。この2つの世界遺産を同時に擁することについて、小野寺さんの考えを、ぜひ聞いてみたい。この質問に絡めて、一生懸命力を入れられました屋久島の世界自然遺産の特徴をどのようにとらえているのかも、答えていただけるとうれしいのですが。

【自然の生態系の優位性と歴史文化の統合】

(小野寺) なかなか難しいですね。平成5

年ですから、もう13年前に、幸運にも屋久島を世界遺産にしたときに、世間で何が起きたかという、富士山にものすごく怒られました（笑）。もちろん、富士山が怒ったわけじゃないんでして。ものすごく怒ったのは、静岡県と山梨県の知事なんです。何でそんな聞いたこともない屋久島を世界遺産にして、世界に冠たる富士山を世界遺産の第1号にしない、ふざけているんじゃないかと相当怒られて、当時、県もだいぶ頑張ったと思います。それで、さっきの養老さんのお話の鎌倉ではありませんけど、人間の心理って何か落とされると腹が立つ。奈良の法隆寺と姫路城が文化遺産の第1号でしたが、京都は世界遺産について今更という気持ちでいたんです。ところが、奈良の法隆寺がなったら、突然自分の京都をしないのはけしからんという動きになりました。それで何年後かに京都の寺社がネットワークで登録されたという経緯がありました。

それで11~12年後、鹿児島県から帰って、この世界遺産も担当している自然環境局長というのをやったんですけど、最後の仕事はまた知床の世界遺産登録でした。それでまた富士山をはずして（笑）。これもかなり怒られました。17~18カ所ぐらい候補地を挙げて議論した結果、知床と小笠原と琉球列島、つまり奄美、沖縄の3カ所になりました。そういう専門家の議論の中でクリアできたのはこの3つだけでした。

専門家の意見では、富士山と奄美を、自然の生態系で比較すると、やはり奄美の方がずっと優れているということですね。私が別にバイアスを掛けたわけじゃなくて、専門家が相当激しい議論をしてたどり着いたのがこの3地区で、その中の1つが奄美群島だったということです。

〔奄美では文化・人の暮らしを組み込める〕

それから、屋久島と奄美の比較は結構難し

いんですが、単純に言うと、屋久島は、屋久杉、縄文杉です。奄美は、そういう並べ方からいうと、あんまり並ぶものがないのですが強いて言えばやはりアマミノクロウサギでしょうか。だけど、むしろ島唄や大島紬や、最近は黒糖焼酎が東京では相当売れ出していますけども、そういう人間がかかわったありようが奄美の特徴だと思います。この風土とすごく長い時間とが複雑に絡み合って、それらが出てきて、そこがきっと奄美の価値の一番真髄というか本質でしょう。

そう考えながら、世界遺産のそもそもの出発を考えると、人間の作った文化財、歴史的遺産と、自然、しかも原生的な自然そのものを合わせて1つのくりにしていることが重要です。そこを深めていけば奄美が世の中に強いメッセージを出せる可能性がある。

僕は、日本が世界遺産にすごく遅れて参加して、観光の看板を1個掛けるということじゃなくて、日本が世界に遅れて世界遺産条約に参加していくときに、何かメッセージを



送れるものはないだろうかということに非常な考えました。屋久島では力が及ばず、文化なり人の暮らし方の問題は十分発信できずに、やや中途半端に終わりました。もし奄美で何かが展開していくとすれば、そういうことを本当に1つの考え方にまとめていけば、奄美が世界遺産に登録されることが、何か世界中の先進国あるいは開発途上国に対するメッセージになるかもしれないし、またそうでなければ、やる意味があんまりないんじゃないかと思えます。

【屋久島と比較した奄美の特徴は何か】

(山田) お話を伺いながら、私たちのプロジェクトが、かなり挑発されたような気になっております。が、会場の皆さんはどう受けとめられましたか。

頭の中はもう真っ白です。本日のような大スターの方々を相手に、どういう話題展開を予定するかですが、手もとの紙には、簡単なメモ程度のシナリオしか書かれていません。そのメモに従えば、小野寺さんに今のお話をいただいた後、養老さんが屋久島に行かれたかどうかの情報を持たないままに、養老さんにも同様な質問を投げかけて、屋久島の特徴を尋ねることになっています。印象だけでも結構ですが、屋久島と奄美の違いというようなものを聞きたいのです。メモには小さな書き込みがあり、人間と自然の付き合い方ではないですかとして、クエスチョンマークが付いております。

先の小野寺発言と非常に重なっているんですが、私の問いかけは意味があるのかどうか。養老さん、思うところで結構ですけども、ご自由に語って下さいませんか。

【人の暮らしは自然の影響を受ける】

(養老) 専門家ではないので、屋久島については裏付けのない感覚的な発言にならざるを得ません。その限定を付していえば、屋久

島と奄美はまったく違う感じがします。それは今、小野寺さんが言われましたけど、要するに人の暮らしは、知らず知らずに自然の影響を受けているんです。私はそう思っています。

【四国の虫分布は東西に分かれる】

私がこのような意見を述べる根拠は十分に持っているんです。対象地域という点では話が少しそれますが、最近、私が調べている四国は、生物を物差しにすると見事に東と西に割れちゃうんです。ごく似た虫が四国全体にいます。それをよく観察すると、東のものと西のものがきれいに分かれちゃうんです。分かれるということは、境があるわけで、じゃあ、境はどこだという疑問が膨らんできました。そこで、四国へ行って数年間、調べたんです。すると、きれいに境が出るんですけど、その境はどこにあるか。普通、四国が2つに割れていますよと言うと、誰でも瀬戸内海側と高知側で、四国山脈を境に、南北に分かれると思うんです。そうじゃないんで、虫の分布は東西に分かれているんです。

【四国中央自動車道の人智と自然】

その分かれ目がどこかを調べてみたら、何と高知から松山や徳島に行く高速道路が通っているんです。四国中央自動車道という高速道路がまさにその境目を通っているんです。その高速道路を通したのは、おそらく以前の建設省でしょう。建設省のお役人は、自分が道路を設計して通すときに、一番コストが安くてトンネルが少なくて上手に道路が作れるところと思って、自分の知恵だと思って作っていると思います。けれども、実はお釈迦様の手のひらだろうと、私は思っているんです。はるか昔には、おそらく四国は何らかの意味で2つに割れていたのであって、その境目のところに道を通したというのが、実態

ではないかと思うんです。



〔奄美は中国南部・ベトナムにつながる〕

話を奄美と屋久島の違いに戻せば、私は若いときに奄美へ来ていて、屋久島へ行くようになったのは比較的最近なんです。両者を並べると、明らかに奄美は、小野寺さんの話にあるように、ある種の独特な文化があるんです。言葉もまったく違ってきます。

動物の世界でも明らかですけど、屋久島は本土の一部、本土の最南端です。奄美は別で、奄美や沖縄で虫を採りますと、似ているのは、むしろ中国南部からベトナムにかけての地域です。ベトナムへ行ったらたくさんいるような虫が奄美にはちょろっといる感じになっている。ですから、我々がベトナムへ行けば、奄美で見たような虫だなど、なるんです。こうした事情ですから、両者はもうまったく違うと考えていい。

鹿児島県の中に世界遺産が2つと、司会者はおっしゃいました。しかしながら、これは人間が勝手にそう思ったので、屋久島と奄美の間にある生物の境は、これは東洋区、昔は古い言葉ですがいわゆる旧北区と言われた、まったく違う生物、地理的な領域です。したがって、別に2つあってちっともおかしくないんです。これは人間が奄美を鹿児島に入れたこと自体が、自然の方からいえばそもそもおかしいんです。先程述べた四国の自動車道路じゃないんですが、2つの遺産が存在しようと、鹿児島県のせいでも何でもないので

す。歴史的な経緯で、どちらも鹿児島県に属しているにすぎないんですね。ある意味では無理やり入れたわけでしょう。

【屋久島の遺産登録では行政と外部移住者の力が決定的だったのか？】

(山田) 会場はかなり沸いております。期せずして鹿児島と奄美の関係にまで踏み込んだご発言になりました。今の例で出てきた四国の話ですが、私ども関係者の中に四国出身が2名います。私自身が東の四国で、実は西の矢野理事が最前列の座席に座っております。東西対比は、この会場の中でもできるという面白い事態に言及させていただきます。

小野寺さん、このイベント企画を発表したときに、ある報道機関の人間が挑発的に私に言いました。先生方はそんな力入れてやるけれども、地元の人ほとんど世界自然遺産なんて関心ないですよ。あれは行政だけが一生懸命やっていて、どこか雲の上のことだと、一般の人々は考えているんじゃないですかと、私たちの活動に水を指すような意見でした。

この意見をそのまま、かつて行政の真っただ中におられた小野寺さんにお渡ししたいのです。世界自然遺産は、先ほど言われたように、ある意味で客観的な基準をパスしないとできない。それをきっちり進めることができるのは、安い報償金で使える大学の学者たちや作業担当の方々から基礎データを集めて、そして、所定の条件を満たすまで、純粹に行政の仕事と考えていいのか。

例えば、私たちがこれから活動していく際に重要なテーマの1つであるんですが、住民と遺産登録ということの間の近さ・遠さの問題ですね。住民にとって、どれくらい近いのか。

第1部の花井発言では、世界自然遺産を目指したわけではなくて、結果として転がり込んできたんだよと、屋久島の人が述べていることに対して、花井さんは非常に肯定的にと

らえておりました。

しかしながら、私はここに、別な見方を持ち込むことができると考えています。

どういうことかと言えば、屋久島に住んでいる方自身は、それほど自分たちの持っている自然の富と自覚を持っていますか財産を高く評価していなかったのではないかと。それよりも、もっと経済的な発展に目を向けておられたのではないかと。これに対して、外部から非常に意識の高い方々がたくさん移住されて、広い意味では環境政策と自覚を持っていますか、環境的な活動をされたのではないかとという推測を抱くことがあります。

今は、問題提起のために、あえて強引な言い方をしています。その立場からすれば、私自身は、奄美はもっと違う道を探すべきではないかと、主張したいわけです。

そういう主張を唱える前段として、まず、この種の意地悪い見方の当否を確認したいのです。世界自然遺産は7~8割方、行政の仕事なのか。そして、住民と一緒にやる場合でも、先ほどの鎌倉の話ではありませんが、地元よりも外から非常にそういう環境にうるさい方々が入ってこられて、中心になってやられたという言い方は当たっているのかどうか。そのあたりをお教えていただけませんか。

【転換のシンボルとしての遺産登録——地元の力の重要性】

(小野寺) 学者も含めて外から来た人が屋久島の自然の価値を実はよく分かって、彼らが引っ張ったというのは、僕は完全に間違いだと思います。奄美はもっとそうだと思います。やはり地元の自然のことを一番分かっているのは地元の人です。それはもうはっきりしているし、それは屋久島でもそうだったと思います。ここを間違えると、だいたいこじれちゃうというか、いいことがあまりない。

屋久島の世界遺産のいきさつはあまり言っ

ても仕方ありませんが、世界遺産にたどり着くのが目的だという考え方は絶対にすべきではないと、僕はむしろ口を酸っぱくして言ってきました。何か世の中の変わり目には、生活も経済も自然保護も含めて、大きな組み換えをしなければいけない。

その中で、組み立てをどう変えていくかというときに、考えていかなきゃいけないヒントの1つとして、世界遺産というものもあるかもしれない。今までの自然保護の考え方と開発あるいは土木事業の考え方は、真っ向対決なんです。お互いがお互いをけしからん、100%間違っていると言って、和解しないし、調整もできないという形にしばしばなります。

地域社会のありようなり経済なりを変えていくというのは大変なことです。地域には明治以来百何十年、戦後でも60年、奄振法ができてからでも50年という時間の蓄積があるわけですから。それを、先ほどの議論の中では10年とおっしゃっていましたが、10年でも足りるかなというぐらいのことをやらなきゃいけないと思うんです。対立型でやっている余裕は、僕はそんなにないんじゃないか。これはさっき養老さんもおっしゃいましたが、仮に世界遺産をうまく使って前向きな明るい話にしていく可能性があるかないかということでしょう。

地域側からすれば、外国の専門家が奄美の自然についてお墨付きを与える、与えないということは、逆に言うと片腹痛いというぐらいに思っていた方が、僕はいいと思います。

地域の議論をまとめていくときに、この島をもっといい島にしていくために、どういうイメージというか、シンボリックなものがあるかと考えたときに、例えば世界遺産というのはもしかしたら使えるかもしれないということじゃないでしょうか。



【行政や外部のイニシアティブは必要なのか】

(山田) すみません、養老さんの発言の順番ですが、もう1つ今突っ込んで、小野寺さんをいじめさせて下さい。今、私どもの鹿児島大学は、この奄美をフィールドにして、先ほど申し上げたように、環境に優しいインフラといいますか施設やエネルギーなどを作り出すという計画を持っているわけです。実は、これは最初ではないんです。

前段は、先ほど発言していただいた屋久島があって、そこでかなりいろいろな計画を立てたわけです。ところが、これはもう小野寺さんはよくご存じのように、地元のいろいろな事情で話がまとまらず、革新的な事業が実施できなかった。私は大学の人間として、そう聞いているわけです。

そうした経験からいって、地元の方の場合には、先ほど言われた組み換えの意識はあまりなくて、どこか外から持ち込むというような手法の方が、現実的手法として採用されていく道なのかなという気がしています。それで、連続質問をさせていただくわけです。変わるような道があるのかどうか。なかなか難しい問題だと思うんです。

ここで私、心配しておりますのは、後半のテーマを早く出し過ぎているのかもしれない。その点でいうと、奄美の場合は、屋久島とは基礎条件が違うといえるほど大勢の方が住んでおられる。そういう大勢の方々と一緒に

に仕事をしていくのは、もっと難しい。とすれば、どうしても行政や外からの力がイニシアティブをとる必要があるのではないかと。屋久島と対比しながら、この疑問にこだわってみたいと思うのです。

【地元の主体性が鍵を握る】

(小野寺) 必ずしも量じゃないと思います。外からの力、あるいは中央官庁なり県庁なりという力がこの地域の中にどう及ぶかというのが、7対3や6対4などというのは、あんまり僕は意味がないんだと思う。現象的には、そういうことはもちろんあるかもしれないんですけど、一番大事なことは、地元側に何か事の本質についての主体性なり考え方がどれだけあるかということが、勝負を決める。

だから、手段として使えばいい。奄振事業は今400億円ぐらいらしいですけど、もっとよこせというのは言ったっていいし、制度であれ、国の応援であれもっとあればいいというのは、僕はそれはどんどん言うべきだと、むしろ思います。

だけど、こうしたいというか、こういうイメージで奄美を作っていきたいというのは、やはり譲らない、譲るべきじゃない。そのときに、パリのどこかで登録されるから、それに併せて何かを作っていくかかと考えると、だいたいろくなことにはならないし、それならやめちゃった方がいいと、僕は思います。

【価値観の多様な社会にかかわるスタンスは？】

(山田) 普通のシンポジウムと比べると、ずいぶん挑発し合っていると理解しております。悪のりして、養老さんの方にも挑発を続けてさせていただきます。私は、鹿児島で養老さんの講演をお聞きして、そしてぜひ奄美で勝負したいと思って、今日の出演をお願いしたわけです。鹿児島でのご発言からは、一

面的にはおっしゃられていないのかもしれませんが、人間中心で、今の便利な文明生活にはかなり批判的な態度を取っておられると受け取りました。

それは1つの生き方としてたいへん尊敬できるのですが、現実の社会は、いろいろな価値観を持った人たちが交じり合っている。そういう中で、いかにすれば豊かな自然をあまり傷付けない社会を作っていくのか。

人間があんまり自己勝手に、自分中心で引っかき回すと、やはり大きな世界、人間を取り巻いている環境あるいは自然といえますか、人間社会の外側を崩してしまう。その警鐘としては、養老さんの言われることは私も理解できるんです。それでは、一步突き込んで、現実の社会の中で、多様な価値観を持つ人たちが、どういう解決、自然と仲良く付き合っていくスタイルを見つけ出していけるんだろうか。ぜひそのヒントを聞いてみたい。これが私の今日最大の挑発でございます。



【根本問題としてのエネルギー問題——秩序問題】

(養老) 私は基礎科学をやっていました。基礎の科学というのは、大げさに言えば、学問で一番基本的なことを考える領域ですね。今、司会者の方は、人間中心とか現代社会はいろいろな考えの人がいるとおっしゃいました。しかし、文科系の方は怒るかもしれませんが、現代生活、皆さん方が近代や文明などとおっしゃっているものを支えているものは

何かということに、理科的に乱暴に答えれば、たった一言、石油です。それで、終わりだと思っています。

人間はなぜ石油を使うのでしょうか。飛行機を飛ばすとか、電気をつけるとか。多くの方は、便利だから使うんだとお考えですけども、私はそう思っていません。物理学には熱力学の第2法則というのがあります。それによれば、秩序を立てていきますと、その秩序に見合うだけの無秩序がどこかに発生するんです。今は面倒くさいから、これ以上は説明せずに、結論だけぼんと言ってしまう。

【現在の文明生活＝秩序を維持する石油】

人間の世界がこれだけ秩序正しく運営される。それが文明生活なんです。どういう意味で秩序が正しいかというと、予測したことがほぼ起こる。電車は時間通り来るし、飛行機は言ってみれば時間通り飛んでくる。それから困ったことが起こらない。自分が生きていくのもだいたい予想できるような形で生きていける。そういうものが秩序です。昔風ですと、それがなかなか円滑にいかないわけです。なぜ現在は、非常に安定した生活が得られるかというと、秩序を維持するものが1つあるからで、それが石油ですね。

どうして石油は秩序を維持できるのかがお分かりにならない方は、石油の分子構造を考えてみて下さい。石油というのは炭化水素、つまり炭素と水素がきちんと並んだ分子なんです。それを人間はばらばらに壊すわけです。水と炭酸ガスに変えてしまう。これにより、無秩序が自然界に発生しますが、その代わりに、我々は秩序を手に入れているのです。

いわゆるエネルギー問題は、もっと根本からいえば、秩序問題だと思います。その根本にあるのは、人間の意識活動です。人間がこうやって考えるのは意識ですが、この意識は秩序活動そのものです。したがって、意識で

世界を動かそうとすれば、必ず、いわゆる環境問題、エネルギー問題、公害問題が発生するんです。

ついでに言ってしまうと、もう私は69歳で、お墓を作って死ぬことを考えていけばいい年です。したがって、乱暴な発言をするのもお許しください。

〔石油が切れると環境問題の決着はつく〕

先ほど第1部で何時間か環境の議論をされたけれども、あれが根本的に片付くときはいつかと問われれば、私は石油が切れたときだと思っています。じゃあ、石油が切れないかという、これは切れるに決まっているんです。地面から掘って使っているんですから。石油が切れたときにどうするか、石油が切れたら、という話をすると、だいたい今の人は、じじいが意地悪を言っているとしか思わないんです。

だけどそうじゃない。過去に実際に切れた時があった。昭和20年8月15日、私は小学校2年生です。私とその前後に生きていた日本というのは、石油が一滴もない世界です。だって、石油の一滴は血の一滴だったんですから。その時代は暮らしにくかったかという、ある意味では暮らしにくかったですが、別な意味ではまったく問題ない世界でした。皆さん、全員貧乏で、ハッピーでした。

この経験を踏まえれば、いろいろな意見があると言うけれども、そんなものは暇だから出てくるのです。あそこまでエネルギーが落ちた状態ですと、人間というのは極めていい人たちが多くなります。奄美の方って、それを分かっているんじゃないですかね。かなり前は、私が来たころは、相当貧乏でしたから(笑)。

いずれにせよ、今後、エネルギーのレベルを下げたときに、我々がどういうふうに暮らさなきゃいけないかは、とっくに考えていい時期だと私は思っています。まだ石油が

安く使えますから、今、石油が使える間に、石油が使えなくなる時代の準備をするというのが正気の人間のやることだ。この点は、もうじき死ぬから、勝手なことを言っているわけではないのであって、十分ご理解いただきたいんです。

〔エネルギーのレベルを下げた暮らしのあり方〕

エネルギーのレベルを下げた段階については、実は田舎は極めて有利なんです。東京みたいな都会は、エネルギーが切れたらもちません。お分かりでしょう。あれだけの人間があんな狭いところに集まっていたら、食べ物をまず毎日どれだけ運ばなきゃならないか。言っておきますと、石油の値段は1970年で、たしか原油がバーレル単位当たり20ドル、現在70ドルですから、30年で3.5倍になっています。これは根本的には下がらない。ドルが段階的に下がっているから、多少割り引きになるかもしれませんが。

とにかく、もういい加減に開発や何かという議論はどうでもいいんですよ。もっとも、1つの考え方として、その石油を早く使っちゃえという気持ちもある(笑)。

炭酸ガス問題などと言って、逆に使用を抑制するというのは、これは長い目で見たら、いいか悪いか分からない。こういうことの価値判断というのは、案外難しいんです。ですから、簡単には言えませんけれども、根本の



©KPTF

ことを申し上げたら、人間の社会というのはエネルギーを使わない限り、ある種の秩序は保てません。それを皆さんは便利や何かとおっしゃって、それを文明などと言っている。実際には、自分のやっていることを石油に担わせているだけですね。

さっき小野寺さんに同ったら、国会は8カ月やっているそうです。立法府でしょう。法律をあれだけ作って、人間が幸せになると思いませんか。そうやってルールを作った分だけ、人間は暮らしにくくなると思う人が、どうしていないんですかね。

私は大道廢れて仁義ありとは、そのことだと思っているんです。根本的なことが分からなくなると、孔子や孟子が出てきて、仁だの義だのと小やかましいことを言うようになると、老子が言ったんです。それは実は物理学の第2法則が分からなくなると、人間はあっちこっちに規則を作ろうとするのと同じだと思います。挑発には乱暴にお答えしてすみません（笑）。

【長期につながる短期課題——遺産登録運動】

（山田） だから、今日の対談者の方は好きなんですよ。だいたい自分が乱暴な人間ですから、乱暴な議論は大歓迎です。

今まで隠していたのですが、私は、大学で経済政策という科目を教えております。つまり、経済的な効率を扱いますので、ここにいると一番いじめられそうな分野の人間なんです。そういう人間が、自分の責任をほっぽり出して小野寺さんに難問を投げ続けたいと思っております。

石油をどう考えるかに関しての話です。石油切れ以後のことを考える時期に来ているんだよと養老さんは言われる。ここは大変難しく、経済学の役割と交差してきます。経済学とは何なのかというと、目の前の人間の欲望を満たす学問なんです。10年後や100年

後はどうなるか、こんなことを言っていたら誰も経済学者を偉いと言ってくれないんです。

それで、来年どうなるかを予測するんですが、ほとんど当たったことがありません。いや、本当です。不思議ですね、経済学というものは、はずれても飯が食える唯一の分野じゃないでしょうか。円高になるとか円安になるとか、成長率はいくらであるとか言っても、ほとんど当たったことがありませんよね。国会よりもっとひどいと思います。国会で失言するとだいたいみんな首になりますから……。

それはさておきまして、話を戻しますと、人間は残念ながら、養老先生みたいに意地悪い人ばかりではありませんので、目の前の欲望を、あるいは満足求めて日々あくせくしている。しかしながら、それを積み重ねていけば、20年、30年先に未来があるのかというと、どうもそうではない。世界自然遺産に引きつけてみると、奄美で遺産登録を実現するために、私どももできる限りのことをやりましようと言っているわけです。その活動は、短期の課題として考えるとだめだという意見が、お2人から聞こえてきます。

しかしながら、私たち日本人は、目の前に具体的な目標を与えられてそれに突進する、このスタイルにはかなり馴染んでいると思うんです。むちをたたかれながらでないで勉強しない高校、大学入試のことから振り返りますと、どうも日本人は短期の人間なんではないか。

したがって、実は長期的に見て大事な課題を追求するのではなくて、今やらなきゃいけない短期の事業中に、長期につながるものが必要なんじゃないか。

そういう意味で、やはり世界自然遺産をこの奄美でアピールするために、長期につながって、かつ、今すぐ取り組むべき具体的な手掛かりが欲しいという気になってまいりま

す。本来、大学の教師がこれに答えるべきだと自省はしています。そのうえで、ひとつ甘えまして、たいへん実務に堪能な小野寺さんは、何かヒントをつかんでいるのではないかと、お尋ねする次第です。

【遺産登録は看板、でも使うには地元の覚悟が必要】

(小野寺) 養老さんみたいな知識人が思想の根幹にかかわるようなことをおっしゃったときに、あんまりまじめに答えようとしても不幸になるだけなんです。だから、限定的に言います。

確かにおっしゃる通り、100年たてば石油はたぶんなくなるんだと思うんです。70ドルで30年間で3倍という話がありましたけど、例えばもっと驚くべきことに、水をコンビニで買うと、まったく日本では取れないはずの石油より単価が高いんです。つまり、そういうことが日本社会の中でもう起きているということをどう考えるのかというのが1つあります。

それから、石油には限界があって、じゃあエネルギーはどうするんだというと、つまり原発になってしまう。そういう議論に入っていくんです、その限りにおいて議論していくと。

そうすると、どうもそういう話を養老さんが言っているわけがないので、奄美の世界遺産をどう考えるのかというときに、相当覚悟がいるぞとおっしゃっていると。それは、僕がもし役人で、奄美の世界遺産の担当者だったら覚悟がいるぞということが1つ。加えて、この会場に来ている人や奄美に生活している人にとっても、世界遺産というのは何か安易な看板をもらおうというのじゃなくて、自分たちがこの地域をどうすると考えるときに、どう覚悟をして使うのかということなんだろうと思うんです。

それで、結果はやはり分からないですよ

ね。経済の予測がどれほど正しいかどうか、当たっているものもあれば、当たっていないものもあるでしょうけど、そういうこととはまた別の意味があるんだと思う。

そういうことを奄美でおやりになるのかどうかということに尽きる。行政の役割なのか地域の住民の責任なのかということは、問題の立て方としては違う。最大の意味は、そこで生きている人たちにとってあるんです。行政は地域側から見れば手段の一つではないでしょうか。

【行政は組みやすい相手か、行政と距離をおく道も】

(山田) 地域がうまく使うために行政はあるんだという小野寺さんの主張は、私にはよく理解できなくて、今、首をかしげておるんです。行政というのはあんまり私どもには優しくないんですよ。この間、関係する諸行政機関とコンタクトをとり、いろいろお願いをしてきたのですが、どうもしっくりした結びつきができない。

考えてみますと、なによりも、大学の教師が威張っていますよね。現実をなにも知らないのに、漠然とした夢みたいな問題を持っていくから、きっと相手をされる皆さんは困っておられるんだと思うのです。逆に、私たちの側からすれば、10回ぐらい新規のプログラムを試みて、一発当たればいいじゃないかという考えが基礎にある。ところが、行政の方は、やはり7割、8割の成功見通しがないと、腰を上げてくれないのでしよう。

それで、行政とは距離を置いて、市民運動や住民活動を展開しているグループと組んで新しいプログラムに挑戦できないかということ、つまり主旨替えすることをかなり本気で考え始めているんです。

これも本当はかなり危なくて、下手すると片思いが強過ぎて、やけどしてしまう。そのリスクはあるにしても、第1部で話題になっ

た廃棄物あるいは護岸の問題にしても、住民の方々が、ある意味では素手でB29に向かうような取り組みをやらないと、行政は動いてくれないのかなという感じを抱いています。

例えば、世界自然遺産の登録というものを推進する場合にも、レッドデータブックの資料がいるとか、あるいは国立公園の面積がいくら必要だとか、行政的に、難しい手続きがあるようです。その点では、行政抜きにはあり得ないんだろう。それはそれで認めたとしても、やはり住民の皆さんが自分らで、極端に言ったら新しい電力エネルギーを使ってみる、あるいはソーラーシステムを開発してみる。これらのテーマにも関心を向けていただかなければ、本当の意味で持続可能な発展の見通しは開けてこないなという気がしています。

これらを実現したら石油を燃料とする電力を全部代替してやっていけるかとなると、それは、まだ絵空事ですよね。だから、私の中ではこの辺りが非常にもやもやしております。先ほど申し上げた10年、20年、30年という将来を考えることも必要な作業かもしれないけれども、それが現実に人々の心を動かすパワーを持つかと聞かれれば、あんまりなりそうにない。行政は使うものですよという先ほどのお話の場合、ここで私が提起しているような試みに対して、行政は力になってくれるんですかね。

【変革には行政の役割が重要】

(小野寺) すごく理念や目標、あるいは哲学が大事というのは、僕は絶対大事だと思います。方針ってすごく大事です。だけど物事を変えていくときは、本当に小さくてもいいから具体的なことをやるか否かにかかっているんです。理念ばかり言ったり思想ばかり言っていると嫌われるだけで、物事はあまり前に進まない。具体的なことをやろうとした

ときに、行政の役割や機能が出てくるんですね。

行政というのは何かものすごい組織で、霞ヶ関の高いビルにいて、あるいは県庁の高いビルというふうに考えちゃわない方がいい。やはり具体的な人です。行政の誰で、課長で、局長でというのじゃなくて、誰と組むかと発想した方がよほど現実的です。そこを、何か法律制度や予算がどうのなどと、全部抽象的なことでやろうとすると、すごく損なことです。

奄美が霞ヶ関や東京に勝てるのは、具体的なことです。これだけは向こうは持っていないんだと。そこに依拠するのが一番重要で有利なことです。



【普遍的な思想が現実を動かせるか】

(山田) 小野寺さんの話には現実の仕組みを知り抜いている迫力といったものを感じて、やり込められているような気分になってしまいます。

そこで、養老先生の方にずっとスライドしようと思うんです。先ほど、小野寺さんは、養老さんの難しい問題提起をうまく切り抜きました。つまり、一方の、どなたにも通用する普遍的な思想では現実世界の飯は食べないと述べる一方で、新しい世界を生み出していく試みを立ち上げる力は、個別の人ですよと主張する。日々の生き方における発想の転換を求める抽象的な思想を、AさんBさんという個人の行動プログラムに移し替えられたわけです。

少し頭を冷やして考えますと、確かに養老さんのお話は、思想のレベルに止まっています。個別的なケースについて、こうしろというような具体的な指針にはあまりかかわらない。それでは、奄美ファンの養老さんに対する私たちの期待からは、ズレている気がします。もう後半に入っておりますので、奄美の世界遺産登録は、こんなふうにしたら面白いよというアドバイスはいただけないでしょうか。

【現実とは、人を行動に駆りたてるもの】

(養老) いや、それに関していえば、私は奄美どころじゃなくて、鎌倉のために考えなきゃいけないんです(笑)。だから、それこそいい知恵があったら借りたい(笑)。

でも、1つ付け加えさせてください。さっきの石油がなくなるという話とよく似ている個人の話——それは、いずれお前も死ぬんだよという話ですが——の場合も、自分が死ぬことを考えて生きている人は、実はほとんどいないのです。生きているうちは死んでいないんだから当たり前かもしれませんが、どうも私たち人間は、こういう問題を考えるのが一番苦手なんじゃないかな。

先ほどからの議論でいいますと、現実をどう動かすかを問題にしている。ここで、小野寺さんの言ったことを引き継いでいうと、私の定義する現実というのは、その人を行動させるものがその人にとっての現実だと、いつも申し上げています。これは、環境保護の問題にしてもそうですし、世界遺産の問題にしても同じです。そういう取り組みを皆さん方がやることによって、ちょっとでも事態を変えられたなら、それがその方にとっての現実なんです。取り組みの目標が現実のものにならない時に何が起るかという、行動が変わらないんです。それだけのことだと思います。

要するに、この世界遺産についても、それ

こそ誰の仕事かと、何かいい知恵はないかという問いかけがなされています。

【具体的な論点が必要】

けれども、私がさっきから言っているのは、これを上手に使うって、奄美をどうするかという話をみんなができるのか——その一点を問題にしている。だから、それとつながった具体的な論点でなければ意味がないんです。

とすれば、焦点は地元の人なんです。少し話が跳ぶかもしれませんが、私は身の上相談なんかでも言うんです。どうしたらいいんですかと聞かれたときに、もういい年をして、他人に自分がどうしたらいいかなんて聞くんじゃない、と(笑)。地方に生きるということも同じです。私がなぜ石油がなくなった場合という総論をやったかという、だって逆に見れば、地方の方が未来は明るいんですもん。東京に住んでいる人たちに対しては、お前ら、こんなところに住んでいるんじゃない。日本に過疎地がいくらでもあるから、そこに土地を買って引っ越せと、僕は言っているんです。じゃあ、初めから地方に住んでいる人はどうするか。私が出したような根本的な考え方から考えていけば、地元の人が地元をどうよくするかは、どんどん答えが出てくるはずなんです。

極端に言えば、何もせんでいいということが出るかもしれません。さっさと石油を使って、自分が生きている間でおさらばと。これも立派な考え方だと思いますけど。でも、端から見ていると、奄美というところが1つのことに何らかの形で集中して、住民というか皆さんが気持ちを合わせて何かをする方がいいんじゃないかと、言いたくなる。余計なお世話ですけど、そう思っているんです。鎌倉でそういうことをやるのは本当に大変ですから。田舎とどっちが大変かわかりませんが、そこら辺はどうなんでしょうか。逆に私

が地元の方に伺いたいのです。

【会場から具体的な問題提起を】

(山田) きっと司会者がいい加減だからでしょう。特別ゲストの方々を挑発し続けてきますと、ついに養老さんが会場の参加者を挑発するという事態になってしまいました。ゲストから投げられたボールは、果たして会場で受けとめられるのでしょうか。さらにいえば、具体的な行動と結びつけてとり上げることができるのは、壇上で話された多くの話題のうち、どの論点でしょうか。

私の腕時計では、現在、7時40分。会場から意見を求めるタイミングとしても、ちょうどいい時刻ですね。その際、はじめに確認しておきたいのは、持続的発展をはずせないという点では、私ども3人とも一致していると思います。しかしながら、世界自然遺産という枠組みの中で、それを追求するにはかなり覚悟がいりますよと、意地悪な挑発をすでに投げかけております。どうかこの挑発に乗っていただいて、一緒に考えていただける、あるいは別な角度から問題提起をしていただける方がございましたら、挙手をお願いしたいと思います。



【最初の一步は自然を守ること】

(発言者A) 奄美の出身でも育ちでもありません。こちらで仕事でお世話になっている者です。司会の先生は、何か世界自然遺産が大切だよという感じで聞こえるんです。で

も、世界自然遺産の登録が目的になってもしょうがないと思うんです。

逆に、自然遺産になりましたよと、観光客が来て、海辺の素晴らしいところに大きな東京の資本のホテルが建って自然を壊すような状況も十分考えられるわけです。だから、本当に自然遺産が必要なのかという議論が大事だと思うんです。

実は、20年ほど前にお世話になっていた頃よりも、ずいぶんよくなったと思うのは、自然じゃなくて、文化に対する気持ちです。私が前にいたときは、シマウタを聞くのは地元の結婚式での祝い歌ぐらいでした。それ以外はほとんど聞く機会がなくて、結婚式の余興もほとんどカラオケという状況だったんです。

今は、いろいろなイベントでも必ずと言っていいほどシマウタがあります。シマウタ大会になると、入場券は売り切れという状況です。この間、日本の民謡大会でも、シマウタは非常に特殊だけれど、特殊だからいいんだということで、日本一にも何回もなっています。小学生でもシマウタを練習している方が多くなりました。ですから、島の皆さんはすぐシマウタを大事にするようになったんじゃないかなと。

それから、奄美の自然がすごく素晴らしいとの話ですけど、残念ながら、奄美の方が奄美の自然のことを知らない。奄美の方で、奄美のサンゴ礁を海に潜って実際に見た人は何人いますか。本当に何パーセントですよ。ですから、奄美の方が自分の自然がすごいとか、大切だと分かることが最初の一步ではないですか。それが分かると、別に自然遺産になろうが何だろうが、登録されようがされまいが関係なく奄美の自然を守って、よくなっていくんじゃないかな。

(山田) ありがとうございます。私は本日のイベントの仕掛け人ですから、世界自然遺

産は大事な目標だと思っています。特別ゲストのお2人は、ある意味で今発言された方と同じようなスタンスで、先ほどから何度も発言されていると思っております。

【長期的な視点で環境教育を】

(発言者B) 奄美で、環境教育を始めています。小野寺さんに、まず1つ質問です。島のことは島の人が一番知っているとの発言についてです。確かに個別の事柄は知っているかもしれないですけど、どれがどれだけ大事だとかを、客観的に分かっているかといえ、そうではない。ですから、先ほどの方がおっしゃったように、島の人が島の大事さを客観的に知ることが、最初に行われるべきだと思います。

それから、今、私が環境教育に力を入れている理由についてです。価値観がいろいろあるという話があったんですが、価値観というのは、やはり得られた情報の中からでしか育たないんです。この脈絡でいえば、今の大人の世代には、世界遺産だ、持続可能な自然だとかは、情報としてそもそも入っていないんです。その入っていないものから価値観を出すのは非常に難しいし、価値観を大人になって急に変わるというのも、かなり難しい。

だからこそ、やはり今の子供たちに、最新の知識や世界遺産のことなど、いろいろなことを新しい知識として入れて、それを新たな常識として定着させる。その上で、子供たちの世代、若い世代がこの島をどうしていきたいかを真剣に考えるべきだと思います。そうでないと、特に年配の方は急に意見を変えることなどできないんですね。

それで、特に山田さんに言いたいんですが、やはり短期間で何か評価というのは出ないと思います。方向が違うというんですか、行政とか上の方から環境の話をして定着させようというのは非常に難しい。逆に、やはりすんなり常識として入る子供たちの方から考えを

広めていくという長い目が必要だと思います。

(山田) 私の方はおしかりを受けと理解しています。小野寺さんにはご質問だそうでございますので、小野寺さんに回します。正確な情報をまず子供たちに教えることが大事で、島の人が事態を的確にとらえていると考えるのは間違いだと言っておりますが。

【変革には工夫、キーワードが必要だ】

(小野寺) お2人の意見にまったく反対はないですけども、さらにその上で現実的なことを考えると、やはり世の中にある考えを広めたり、事態をよくしていくというのは、いろいろな工夫が必要になります。そのときに例えば、1つのキーワードや統一的なテーマがあると、非常に有効である場合がある。それが奄美にとっての世界遺産であるかどうかについては、少し議論した方がいいですね。でも、それはかなり有効なキーワードになり得るんじゃないかということが1つ。

それから、前のシンポジウムでもそうだったんですが、どちらが先かという議論は当然あって、ひとつひとつを固めた上で次のステップに行くべきだというのは、その通りだと思うんだけど、現実の中では、同時並行というのものもあるんじゃないかと思う。だから、何か得体の知れない世界遺産の議論と、個別のものすごく小さなものを守っていくことが、実は同時並行で響き合って、むしろいい方向に向かうということもあるかもしれません。そこはあまりかたくなに手順を追うと考えない方がいいんじゃないかなと、実践的にやってきた立場では思います。

(発言者B) 今の意見に対していうと、世界遺産を切り離して考えているわけではなくて、ゴールとしては非常にいいテーマだと思います。島の人が考えを一新する非常にいい

きっかけにはなると思います。こちらは、手順、手順と考えているわけではありません。島の自然を守ることをやはり第一に重視し、それを持続的に利用していく考えは、今の島にとって最も必要なことになるんじゃないかという認識はあります。

(山田) ありがとうございます。次の方。



【NPO、ボランティアが前面に出ている沖縄——マングローブの状態】

(発言者C) 去年の3月に、町の視察団の一員として沖縄県の国頭村と東村を視察に行った時の見聞を少し話したいんです。あそこの定住人口は東村が2,000人弱、国頭村もそんなものだと思います。それらの村に、何と年間20万人の交流人口がある。それで、その20万人の交流人口を受け入れているのは、驚いたことにNPOなんです。NPOを中心とした住民総出のボランティア活動です。前面には行政がまったく出てきていないんです。

一番いい例が、マングローブなんです。奄美の住用にもマングローブはあるんですけども、我々は視察してすぐ気づいたんですが、東村のマングローブには、ごみ1つ、空き缶1つ見当たらないんです。実にボランティア活動で素晴らしい自然が維持されて……。他方、我が奄美大島のマングローブに行った

ら、ごみだらけです。

こんなに小さな2,000人しかいないような村落で、行政がまったく関与しないで、これだけの素晴らしい自然を維持し、しかも年間20万人の交流人口を迎える。やればできるという発見は、目からうろこなんですけれども、要は、住民のボランティア活動なんです。住民がその気になれば、ああいうことができる。

そういう意味で、奄美群島のこの世界自然遺産も、先ほどから話されているように、いかに住民が覚悟を決めて、自らの汗を流して1つの目標に向かって努力できるかだと思います。

【沖縄は大学が知恵を出している】

もう1つ大事な点は、琉球大学法文学部の中には観光学科ができています。この大学の観光学科が現場にフィールドワークでどんどん入ってきています。我々の行く先々で、必ず琉球大法文学部の観光学科の皆さんとぶつかります。そういうことで、なるほど、大学の皆さんが直接住民に知恵を提供しているなど感じたわけです。これは、非常に参考になりました。

(山田) ありがとうございます。

養老先生、奄美のマングローブはあんまりきれいじゃなくて、東村のマングローブはきれいなんだそうです。これはもう、遺伝子の議論ではどうにもなりませんかね。思想的な話として申し上げれば(笑)。

【必要性の問題としての認識】

(養老) それは完全に必要性の問題だと思います。モチベーションというか。人間なんて、そんな決め付けるものではなくて、当然、変わり得るんです。

私はさっき石油切れの話を申し上げました。お気づきのように、今のご発言はみんな

そうですけれども、結局は石油がなくなっても続けられることですよ。そういう判断基準でお考えになったらどうですかと、申し上げたつもりなんです。

だから、自然保護とか環境保護というよりも、どうせ今のような状況は長い目で見れば続かない。だから、状況を考えつつ、最終的な落としどころに近い活動をやっていけば、円滑にいくんじゃないでしょうかと、言ったつもりなんです。

(山田) まだ手が拳がっております。どうぞ。

【持続的な発展とはどのような意味か】

(発言者D) 地元の人が地元の自然、環境をどれくらい知っているか。これについて2~3回のやりとりがありましたので、私なりに発言させて下さい。

まず、地元の人が地元のことを知っているかとの問いです。知らない人がいるのは残念ながら事実です。しかし、知っている人もいます。それから、知ろうとしない人が結構多いんです。皆さんはその3つのどちらでしょうか。まず、よく知っている人。私はあっちこっち飛び込みで、いろいろな方に、わりと高齢の方々が多いんですが、この場所は昔はどうでしたかと、聞くんです。すると、ものすごく詳しい。植物も生き物も自然の川の流れからせせらぎまで、ものすごく詳しく知っているんです。

いわゆる科学的な知識や学問上の体系立てたことは分かりません。とにかく自然の営みを知っているんです。まさにその人にとっては体の一部になっているんです。体の一部になっているから、それを特に持ち出して貴重なものかどうかなどと考えることはしません。そういう態度から、私たちはどう学ぶかを1つは考えなければいけない。

また、さきほど住用のマングローブの話が

ありましたけれども、行政の方々が足元の自分の行政区画の中の自然環境をやはりもう少し勉強して下さればなあ、という気持ちを抱いています。1人、2人、個人個人だとすごい人がいらっしゃるんです。しかしながら、全体として行政の方々に学習の必要を感じております。

それから、もう1つ。持続可能な発展という今日のテーマについてです。私はこれを見たときに、発展という言葉はどういう意味づけの下で考え方で使われたんだろうかなと疑問に思い、今でも考え続けております。

【持続的発展・開発と文化のあり方】

(山田) 最後に私が逃げられないように追い込む質問でございました。

この発展というのを英語では development、したがって sustainable development を翻訳した言葉だといえるでしょう。私は外国語が苦手ですが、少しだけ説明を加えますと、先ほど最初に小野寺さんの発言にあった発展途上国という場合にもディベロプメントという言葉を使います。そして、この言葉は、背後に経済的に豊かにしていくというようなニュアンスが含まれていると思います。

もっとも、それは非常に広がりのある言葉だと理解しています。別な言い方では、この言葉を開発と置くこともできるはずですが、それをあえて発展の方で取らせていただきました。そこには、経済的な豊かさを抜きにしては、いずれの社会であれ、人々と一緒に歩むのは難しいだろうという思いが込められています。その点は、養老先生の立場とは基本的なスタンスが違うかと思っております。

もう一方で、「持続的な」の語を付けたのは、がむしゃらにただ経済的な豊かさを求めようとは考えていないからであります。何パーセント成長がいいのか、数量化はできないんですけれども、貧困でもいいとは思いません。中途半端かもしれませんが、自然とう

まく付き合っていけるような豊かさがあるのなら、それを目指そうではないか。これが、本日のイベントを支えている思想だと理解しております。

【自然と文化を一体的に捉えた目に見える事業】

それともう1つ。先ほど小野寺さんから出ました、遺産登録というのは大変新しいアイデアだということに関して、です。私たちも自然と文化を1つにしています。これを強く意識しております。はじめに言いましたが、前のプロジェクトでは4分の3ぐらいが文科系で、今回、そのメンバーは少ない。具体的に目に見える事業を重視しているからです。しかしながら、自然と文化を一体的に扱う態度が大切だという点では、私どもはまったく小野寺さんと同じ思いです。環境に優しい技術というものが仮にあったとしても、それをうまく使えるには照応する文化のあり方があるだろう。新しい技術、そしてあまり自然を傷めない、そういうエネルギーや廃棄物の処理の仕方や、そして産業発展のさせ方がある。それらをうまく使えるかどうかは、やはり人間次第であろう。さらにいえば、そうした自然との付き合い方が長続きしていけば、文化になるんだろうと考えております。

ぼちぼち時間が迫ってまいりました。あとお1人、どなたか。せっかく大スターがお見えですので、できたらご質問であった方がいかなと思っています。

【遺産登録は上から与えられた印象】

(発言者 E) 現時点では、奄美は長い時間をかけて世界自然遺産への登録を目指した方がいいというのが私の主張です。その結論を持った上で、あえて問わせていただきます。そもそも奄美でなかなか住民の方から世界自然遺産に対して取り組みが進んでいかない。この問題の根本には、世界自然遺産という看

板を中央から与えられたという経緯がある。上から与えられたという発端の在り方が1つの矛盾というか、克服しないといけない課題じゃないかなと思っています。つまり……

(山田) すみませんが、少し短く。でないと、あなたのご主張をのべるだけで時間がなくなるかと思いますが。

(発言者 E) そうですね。出発点として世界自然遺産が中央から与えられたという矛盾を、どうやって解決していけばいいのか。それが解ければ、住民から遺産登録を目指していく動きが出てくると僕は思うんです。小野寺さん、この点に関してはいかがでしょうか。

(山田) 小野寺さん、よろしくお願ひします。

【歴史と文化に自信をもて】

(小野寺) 素直に自信を持てばいいということです。自然についても、歴史とか文化についても、奄美は素直にストレートに自信を持って、そのままでやれると僕は思います。むしろ、一人一人がそう思えるかどうかということに懸かっているんじゃないでしょうか。

(山田) 養老さんも、うなずかれております。最後のお1人と申し上げましたが、先ほどほぼ同時に手を挙げていただいたのに、発言させないというのは失礼にあたります。そちらの前の方。

【若手ががんばろう】

(発言者 F) 質問ではなくて、意見ですので、特別ゲストの方々に背中を向けさせていただき、会場の皆さんにお話ししたいと思います。

私は奄美出身なのですが、今回、このシンポジウムに参加して、すごく恥ずかしいと思うことが2つありました。それは、私自身が奄美に対してとても無知であるということ。そして、私と同じ若い世代の方が少なく、私自身、友達を誘うという行動を取れずに、このシンポジウムに参加したことです。やはり、奄美の人たちが奄美のことを一番思うことが、持続可能な発展につながると思います。これからもっと奄美の人自身が奄美のことを考えていくことが大事だと思います。



(山田) 特別対談を締めくくるのに一番ふさわしい決意表明ではなかったでしょうか。特に若い方が力強い発言をしてくださるのは、我々年配組としては非常に心強い。企画者としては、本日のイベントを開かせていただいた意義を簡潔に表現していただいたとの思いを抱きながら聞かせていただきました。

最後になりますが、主催者の一人として一言、お礼を述べさせていただきます。鹿児島大学が本腰を入れて奄美と向き合っていることを地元の方々にお示しようということで、本日のイベントには永田学長、矢野理事に出席いただきました。

実は、当初の企画段階では、全学プロジェクトのメンバーだけの力で実施する覚悟でした。ですが、途中から、とても自分たちだけでは開催できないことが分かりまして、奄美群島広域事務組合や奄美市にいろいろなこと

をお願いに上がりました。

それ以外にも、会場となったホテルや知人の方々の援助があり、なんとか、イベントの開催にこぎ着けたというのが実態でございます。関係の皆様のご助力には、心より感謝申し上げます。

また、会場の皆様には、長時間のイベントに熱心なご参加をいただき、深く感謝いたしております。今日を出発点にして、今後、奄美の持続的な発展をめざすさまざまな活動に私どもを加えていただければ、とてもうれしいと思っています。ありがとうございました。